

幼児の造形表現における素材・材料の研究

——オイルパステルによる造形活動と展示の展開について——

杉 本 亜 鈴・成 清 美 朝

I 研究目的

本研究の目的は制作者の立場から絵画の題材及び教育法を技法・材料の観点から体系化することにある。現在、美術教育の現場では教員の指導力向上が求められ、養成過程である大学サイドでも学生に対するより高度な専門教育や現職教員の再教育に対応できるプログラムの確立が急務となっている。そこでこのような現状に即した専門教育のシステムを作ることが必要であると考え、今回の研究を立ち上げた。本研究は日本学術振興会の科学研究費交付を受けた共同研究「教育専門職大学院対応プログラムにおける絵画技法指導の体系化に関する研究」の一環であり、今年度のテーマとして研究領域を幼児教育におけるオイルパステルの活用と展開に絞って行った研究である。

II 研究方法

1 研究実践プログラムの作成

本研究の特色は現役の制作者であり現職教員である複数の研究者がオイルパステルについて「表現」と「教材としての可能性」の観点から分析と考察を行うことにある。制作・研究・教育の分野に亘って広く研究の特色を活かすため、各分野の客観的な共通言語としての「素材・材料」に着目した。研究の方法として素材・材料（いわゆる画材）の組成と歴史を踏まえ、その物質としての存在感に助けを借りながら表現の必然性にアプローチを試みる実践プログラムを作成した。今回の実践プログラムでは、4～5才児を対象として（授業・研修では想定して）10メートルの麻キャンバス布にオイルパステルで抽象表現を行った。今回、具象ではなく抽象表現を行う目的は子どもと保育者（教員）の描画に対する苦手意識の払拭と、伸びやかな描線を引き出すことにある。

2 プログラムの実践

研究の主旨に基づいて作成した実践プログラムを実際に複数の授業・ワークショップ・教員研修会で展開した活動の報告を行う。上記の通り、今回の実践プログラムのねらいは素材・材料の持つ組成及び歴史からその特性を理解し、表現の向上につなげようとするものである。同時に実践プログラムがその場限りのイベントに終わらないよう、教育現場における展示方法の提案までを行った。

3 作品展示

今回の研究では幼児教育の現場で最も身近な画材であるオイルパステルを取り上げるにあたり、展示の役割を重視して研究と実践を行った。本研究の結果のひとつとして、実践プログラムに基づいて制作された子どもの作品（研修及び授業での実践の場合は子どもを想定した作品）を現職幼稚園教諭が展示形態にトリミング・額装した作品を紹介する。

4 考察

実践活動の結果を整理し、今回の研究の効果を検証する。また、教育現場における本研究の可能性を提示するとともに今後の課題となる事項を洗い出し、本研究の問題点に対する考察を行う。

III 実践プログラム要旨

1 素材・材料の持つ歴史と特性について

本研究では、画材の名称からその成り立ちと歴史的背景を探り、画材の特徴を認識することで表現の本質を核とした絵画指導の展開をはかる。

幼児教育の現場で使用する「クレヨン」「クレパス」と呼ばれる画材は大きく「オイルパステル」に分類することができる。現在、一般的に「パステル」と言うとソフトパステルを指す場合が多いが、「クレヨン」「クレパス」は画材としてはオイルパステルの一種に位置づけられると考える。描画材は基本的に顔料とメディウム（※註1）から成り立っており、このメディウムの差異によって種類が分類される。

(1) パステル

ラテン語で糊や練りものを指すpastaが語源で、小麦粉を水で練った食材を示すイタリア語の「パスタ」や、英語の「ペースト」と同義である。パステルは大きくメディウムの主成分が油やロウであるオイルパステルと、アラビアゴムなど水性のメディウムを主成分とするソフトパステルに分類することができる。

①オイルパステル

ここでは画材の位置づけとして、いわゆる「クレヨン」を含む油性の棒状描画材料を総称してオイルパステルと呼ぶ。顔料（体质顔料を含む）に油脂や各種のロウ（蜜ロウ、木ロウ、パラフィン、合成ワックスなど）を混ぜて加熱し、練り固めたもの。基本的な組成は「クレヨン」と同じだが、一般的にオイルパステルと呼ばれる画材は「クレヨン」よりもロウ分が少なく、油脂成分が多いように感じる。オイルパステルは油を多く含むため柔らかく、ベタ塗りの太い描線に向いている。ロウや油の配合比率はメーカーによってちがい、柔らかさや撥水性も異なる。色彩は明快で強く、不透明色の張りと深みがあり混色や重色が可能。

②ソフトパステル

ソフトパステルとは顔料（体质顔料を含む）をアラビアゴムなど、固着力の弱いガム樹脂で棒状に固めた描画材料を指す。主に素描用として用いられるため、描画時に画面を手で擦ったりして濃淡の調子が調整し易いようメディウム（バインダー）が弱く作られている。このため手に持つだけでも顔料が付着し、飛沫粉の誤飲や吸入の危険性が高いため幼児教育の現場ではあまり使用されない。また、紙に描いたときの感触は乾いたもので、オイルパステルのような油の滑らかさはない。ソフトパステルの特徴は名称の通りその柔らかさにあり、類似画材であるチョークやコンテと比較して、硬度の点においても描画上の風合いでも柔らかい。メディウムの影響を受けないため発色が大変良く、混色しても色彩の明るさを保った中間色を保つことができる。油やロウで顔料を固めないため、画面上でも乾燥した白っぽい色を保ち、この特徴ある色彩が「パステルカラー」の語源となっている。

(2) コンテ

フランスの化学者コンテ（N.J. Conté 1755～1805）が作り出し、その名前がつけられている画材である。その画材としての特徴はソフトパステルに酷似しているが、ソフトパステルよりも硬く折れにくいため、細くシャープな描線が可能である。多くのソフトパステルが円柱状であるのに対し、「コンテ」という商品名で販売されている商品に四角い棒状のものが多いのはこの特徴を活かすためであると考えられる。ソフトパステルと同じく固着力が弱いので、描画後には定着液を噴霧して画面を定着させる必要がある。

(3) クレヨン

顔料（体质顔料を含む）を硬質ロウ、流動パラフィン、硬化油と混ぜて練り固めた小さな棒状の

画材。ロウを多く含むので透明感があり、手軽に使用でき、折れにくく描き心地が良いのが特徴である。16世紀中頃からイタリアやドイツで主に素描用として使用され始め、17世紀には広くヨーロッパで使用されるようになった。明治期にフランスから西洋絵画技法が流入したのに伴って日本に持ち込まれ、棒状の描画材料を指すフランス語のcrayonから「クレヨン」と呼ばれるようになったと考えられる。

フランス語のcrayonはもともと「棒状の描画材料」という意味であるため、鉛筆・クレヨン・パステル・チョークなどの総称である。現在のフランスで「クレヨン」と言うと鉛筆を意味することが多い。「クレヨン」の語源は白亜やチョークを示すフランス語のcraieから、ラテン語で白墨・膠灰粘土・白を示すcrētaまで遡ることができる。白亜は生物起源の炭酸カルシウムであり、「白亜」という名称は原料である石灰岩が白亜紀の地層から採れる石灰質プランクトンの遺骸であることによ来する。今日我々が言う「クレヨン」はcrayon pastelとも呼ばれるが、上記の「クレヨン」と「パステル」の語源から考えると「クレヨンパステル」の意味するところは「白亜の練り物」となり、画材の名称がその組成のルーツを示していることが分かる。

現在の日本で「クレヨン」と呼ばれるものはオイルパステルの中でも特にロウを多く含むもの、また幼児向けのものを示す傾向がある。

(4) クレパス

1～3が画材の総称であるのに対して「クレパス」は固有の商標である。(サクラクレパス) 1925年にクレヨンとパステルの特性を兼ね備えた新しい画材として開発され、幼児(児童)教育の現場で広く使用されるとともに画材としての知名度が高まった。大正時代、山本鼎(1882～1946)らが手本の模写である「臨画」による日本の美術教育を批判し、生来子どもの持つ自由な感性や表現力を認め自然を手本とした描写を重視した自由画教育運動を起こす。大正14年、この山本の自由画教育運動に賛同した櫻商会(現・サクラクレパス)により「クレパス」が開発され、全国的に広まった。それまで使われていた外国製クレヨンは価格が高く、ロウを多く含んでいたため硬く重色が困難であった。国産品で入手し易く柔らかいクレパスは幼児教育・初等教育の現場で急速に広まって行った。大正15年、幼稚園令・幼稚園施行規則が示され、幼稚園が正式の教育期間として位置付けられる頃になると保育内容の項目制限が緩和され、それまでの恩物と臨画中心の「手技」から現在の自由画に近い制作ができるまでに発展した。

主な成分は顔料(体質顔料を含む)、合成ワックス、流動パラフィン、動植物性油脂で、これらを加熱・形成して作られるが、ロウ(合成ワックス)と油(油脂)の配合のバランスがクレパスの画材としての特徴を作っている。描き心地は滑らかで柔らかいため幼児の力でも扱い易く、画面への定着も良い。「クレヨン」よりもロウが少なく油分が多いため、混色、スクラッチ(削り出し絵)などには向いているが、バチック(はじき絵)の場合は使用する絵の具との相性によって効果を得られにくい場合もある。

IV 実践記録

1 平成19年度 実践活動一覧

活動の名称	実施日	対象（参加人数）	会場
制作1（造形表現法）	H19.7.6	幼児教育科2年生（22名）	東京成徳短期大学
額装1（造形表現法）	H19.7.6～10.31	幼児教育科2年生（5名）	東京成徳短期大学
制作2（わくわく造形ひろばワークショップ）	H19.8.31	5才児とその保護者（80名）	東京成徳短期大学 附属第二幼稚園
額装2（東京成徳短期大学附属第二幼稚園教員研修会）	H19.8.31	私立幼稚園現職教員（15名）	東京成徳短期大学 附属第二幼稚園

2 実践プログラム実施概要

タイトル：幼児の造形表現における素材・材料の研究—オイルペイントの活用と展開—

内容：
① 5歳児親子対象ワークショップ「わくわく造形ひろば」

② 教員研修会

「オイルペイント（クレヨン）の活用と展開」—画材の特性から造形展・行事における展示まで—

日 時：平成19年8月31日（金） **①** 9：30～11：00 **②** 11：00～12：30

場 所：東京成徳短期大学附属第二幼稚園

対 象：**①** 5歳児&保護者：80名程度 **②** 幼稚園現職教員：15名程度

講 師：杉本亜鈴（東京成徳短期大学）・成清美朝（東京芸術大学・東京成徳短期大学）

目 的：制作者の観点から画材の特性をふまえ、表現と展示の可能性について研修を行う

3 使用した材料

- ・キャンバス ・オイルペイント（サクラクレパス） ・画用紙（色画用紙） ・トーナルカラー
- ・のり ・ハサミ ・スクラッチ用品 ・ポリ袋 ・ブルーシート ・新聞紙 ・額

今回、キャンバスは油彩用の麻キャンバス（ジェッソ地塗りしてあるもの）を採用した。使用する支持体を選定する際、安価で使い易いアクリル用のビニールキャンバスも候補として検討したが、支持体自体が持つ色や風合いといった素材感（材料としての存在感）を重視して麻キャンバスを選択した。ジェッソ地塗りしてあるキャンバスを選んだ理由は、オイルペイントの描線が細いため、発色の効果をねらったものである。キャンバスのサイズは課題の目的と教育現場での機能性を考慮し、140×1000cmとした。また、描画材は子どもの力でも凹凸のあるキャンバス画面に塗り込みができる柔らかさを持つ「サクラクレパス」を採用した。

色画用紙は、表面の凹凸の少なさ（色彩を認識しやすい）から再生色画用紙を準備した。紙表面の滑らかさという点ではカラーケント紙の方が望ましいが、幼児が色彩構成を行う際に画用紙の色を選ぶことで色彩感覚の成長をねらうため、できるだけ数量を多く準備したいという目的から入手しやすく価格の安い再生色画用紙を選択した。トーナルカラーは日本色研のPCCSに基づいて作られた色紙で、安価で発色が良く、色数が多いためこれを採用した。

のりは紙のシワよりも防ぐため、水分量の少ないスティックのりを使用した。スティックのりは切り取ったキャンバスを色画用紙にはり付ける際にも接着力に問題はなかったが、キャンバスの布目の凸凹にのりが入り込むため使用する量が予想以上に多く、予備の準備が必要であった。また、ハサミは厚手のキャンバス布をカットする大型のものと、子どもの手で細かい作業がしやすい小型のものを各20本準備した。

4 制作プログラム

(1) 導入・手の形をなぞる ～形態の記録～

はじめに、真っ白なキャンバスに対する抵抗を取り除くため「なぞる」という描画行為を利用する。キャンバスに自分の手や足を置き、その外周の形をオイルパステルでなぞる。幼児の描画活動では日常よく見られる描画のかたちであるが、オイルパステルの色を変えたり、形を重ねて形を連続させたりすることで時系列的な形態の記録という表現効果をねらった。

(2) お絵描き体操 ～描画の発達段階をたどる動作～

次に身体の運動から描画の発達段階をたどる。肩・肘・手首・指の順に段階的な描画を行うと、子どもの発達段階に良く似た描線が画面に現れる。今回は支持体であるキャンバスのサイズが10メートルと大きいため、伸びやかな描線を引き出すことを目的とした「準備体操」の役割を期待して行った活動である。

肩の動作	：大まかな点描・伸びた点描・大きな半円のスクリブル	→ 錯画期
肘の動作	：中くらいの点描・中くらいの半円のスクリブル	→ 錯画期
手首の動作	：細かな点描・螺旋状の円・精密なスクリブル・閉じそうな円	→ 意味づけ期
指の動作	：完全に閉じた円・頭足人・文字のようなもの	→ 前図式期

(3) オイルパステルの電車ごっこ ～画面に一体感を持たせる動線の表現～

ここまで描画活動では、座った子どもの手の届く範囲にしか描画を行うことが出来ないため、大きなキャンバスの画面にひとつの作品としての統一感を持たせることが出来ない。そこで、オイルパステルを持って画面の上を移動する「電車ごっこ」を行った。体重をかけてもオイルパステルが折れないよう、数本のオイルパステルを手に持ち、画面上で子ども同士がぶつかった場合は双方が方向転換するという方法で複数方向の描線の展開をねらった。

さらに画面上の表現の密度を上げるために、オイルパステルを画面から離さないようにして画面の周囲を全員が一方向に回る・全員で逆回転するという「電車ごっこ」の描画を行った。

(4) 塗り込み ～画材の特質を活かした集中的スクリブル～

幼児期のスクリブルは密集された描線のエネルギーを感じさせる。今回のプログラムでは支持体が紙ではなくキャンバスであるため、布目による表現の効果が大きかった。子どもが軽い力で描いた場合はかすれの美しさが現われ、強い筆圧で描いた場合には布目の凹凸にオイルパステルを擦り込むような描画行動が見られた。

(5) 鑑賞 I ～大作の感受～

ある程度描画の密度が得られた時点で一度画面から離れ、キャンバスを垂直にして鑑賞する。本実践プログラムは対象者を変えて4度実施したが、いずれの場合もこの場面が制作者から最も大きな歓声が上がるシーンであった。

(6) 気に入った部分をはさみで切り抜く ～支持体の特徴を活かした特徴的制作～

前述の通り、今回の実践プログラムでは油彩用の麻キャンバスを使用した。画材の選定の過程で、より麻の質感を持った生キャンバスや、安価で伸縮性に優れたアクリル用の合成繊維キャンバスもサンプルを取り寄せ検討したが、画布としての重厚な存在感とオイルパステルの発色の良さから油彩用の麻キャンバス（ジェッソ地塗りをしてあるもの）を選択した。幼児の造形活動用教材として不織布もよく用いられるが、布目の大きさ・密度とハリ、風合いの点で油彩用キャンバスに劣るため今回のプログラムには適さないと判断した。本実践は切る・折る・包むということが可能な布の特性や、画布の風合いに助けられて表現が成立している。また、油彩用キャンバスを使用するにあたって麻や膠、ジェッソの特有のにおいを心配したが4回の実践を通して指摘を受けることはなかつた。

(7) 平面構成～形態の考察～

キャンバスを切り抜く、切り抜いたものを組み合わせるという作業のくり返しにより平面構成の検討を行う。作業と検討のくり返しによって表現の向上を目指すことが目標の活動である。

(8) 色面構成～色彩の考察～

色画用紙を支持体に、切り抜いたキャンバスとトーナルカラー（日本色研の色彩色紙）を組み合わせて色彩構成を考える。色彩を「選ぶ」ことによって子どもの色彩感覚の成長をねらった活動である。

(9) 展示（鑑賞Ⅱ）～制作の振り返りによる感受・達成感の認識～

5歳児を対象とした実践プログラムでは時間と会場条件の制限があったため、床置きで簡単な鑑賞活動を行ったが、短期大学2年生を対象に行ったケースでは、この段階で壁面展示を行った。また、現職公立幼稚園教諭（120名）を対象に実践プログラムを行ったケースでは、壁面が確保できなかったが、床置き鑑賞時に色彩の効果を充分感受できるようブルーシートを撤去して鑑賞を行った。

5 研修プログラム

(1) 画材の組成と成り立ちについて（杉本）※括弧内は担当研究者名

- ・画材が作られた目的と経緯から題材としての新たな発展の可能性を探る
- ・素材感による作品完成度の引き上げを体感する

(2) 実技（制作）活動の目的とねらい（杉本）

- ・「わくわく造形ひろば」で展開したプログラムのねらいについて
- ・子どもの表現意欲を高める活動の展開方法について

(3) 題材運営に関して（杉本）

- ・実際の作品に触れ、行事や造形展での題材展開を考える
- ・本題材の予算、準備、後片付け、作品の収納・保管に関する利点と留意点について

(4) 展示及び鑑賞に関して（成清）

- ・コンテンポラリー的展示の可能性について
- ・参考作品提示・解説

(5) 教員による子どもの作品のトリミングと額装（成清・杉本）

「わくわく造形ひろば」で制作した子どもの作品をもとに、実際に教員が現代美術の観点から額装・展示を行う。

(6) 質疑応答

6 作品展示

(1) 展示発表概要

今回の研究では、制作者の観点から幼児教育の現場で最も身近な画材であるオイルパステルを取り上げるにあたり、展示の役割を重視して実践プログラムの作成を行った。本展示発表では、研究の結果のひとつとして、4回の実践プログラムのうち2回の活動に基づいて制作された作品を文末に写真で紹介する。

(2) 本研究にともなう展示活動一覧（平成19年度）

名称	実施	展示担当	会場	主な対象鑑賞者
造形表現法（額装前）	平成19年7月	幼児教育科2年生	東京成徳短期大学	学生
東京成徳短期大学附属第二幼稚園	平成19年8月	教員（幼稚園教諭）	東京成徳短期大学附属第二幼稚園	幼児・保護者
第13回美術教育研究大会展示発表	平成19年11月	研究者	東京芸術大学	研究者・教員・一般来場者
造形表現法（額装後）	平成19年1月	研究者 幼児教育科2年生	東京成徳短期大学	学生・保護者・高校生・教職員

(3) 本実践活動における展示の目的

① 教育的観点から

幼児教育の現場における造形活動でも、展示の持つ教育的效果は広く認められているが、子どもの作品を掲示する（並べる）展示の形態は相対的な評価の対象となりやすく「ウマイ・ヘタ」の概念を生む危険性を多分に孕んでいる。今回の実践活動及び展示は、子どもの作品を一点の絵画として尊重する大人の姿勢を通して展示の新たな可能性を提案するものである。

また、幼児に対する描画指導の観点から、保育者による額装・展示は間接的な描画の指導（方向付け）であると言えるため、加筆指導に代表される直接的な描画指導を行った場合と比較して「子どもの絵に大人が手を加えること」の弊害を最小限にとどめることができると考える。廃材利用や小品展示の方法で予算・スペースの問題を解消し、教育現場や家庭において広く客観的な鑑賞に耐え得るレベルの展示を行うことは子どもの絵の「作品」としての価値を認めるものであると考え、今回の提案を行った。

② 現代美術の観点から

色彩構成・形態構成のプログラムにおいてカットしたキャンバス描画面の残りを使って、保育者（大人）が子どもの作品を展示形態にトリミングする。今回は、抽象的な描画表現の魅力を最大限引き出す展示形態として、描画面のオブジェクト（object）化を提案した。例えば作品を箱に入れる・ガラスで挟み込む・厚みを持たせるという方法で客体として成立させる。

展示段階で描画面をカットする・包み込むという行為によって、キャンバス布に描いたことの必然性が強く表出する。準備段階から実践プログラム、トリミングまで計算された大人の意思が介在することになるが、出来上がった作品には作為的ではない子どもの描線に幼児期ならではの作品価値を読み取ることができる。

V 考察

今回の実践プログラム終了後、受講者からアンケートや聞き取りで感想を訊ねた結果「ウマイ・ヘタなどの描く苦しみを感じずに楽しく制作できて良かった」という意見が目立った。今回の実践プログラムでは異種素材を用いた平面上の形態構成や色彩構成、描線の伸びやかさなど、造形的にかなり高度な課題を課しているにもかかわらず、実際に制作をしている時点で制作者はあまりそれを感じていなかったということになる。これは実践プログラムとしてひとつの成功かもしれないが、同時に展開する側の保育者（教員）にはもっと強くアピールしていかなくてはならない問題である。造形能力や感性の発達は個人差が大きく、発達のあらわれ方も多岐に亘る。また、造形の課題を消化したからといってその成長効果は即効性があるものでもない。したがって造形の教育を受ける側（発達する側）は課題を与えられたことを認識せずに成長することができるが、教育を行う側（発

達を促す側）には明確な目的意識が求められるからである。

※註1：ここで言うメディアとは顔料を紙や布などの支持体に定着させる接着剤となる物質を指す。バインダー、展色剤、ビヒクルなどと同義。

参考文献

- R.J.ゲッテンス G.L.スタウト『新装版 絵画材料辞典』1999年 美術出版社
大澤 昇 『小学館ローベール仏和大辞典』2005年 小学館
降旗千賀子『画材と素材の引き出し博物館』1995年 中央公論美術出版
田中秀央『羅和辞典』2006年 研究社
長坂光彦『幼児教育選書・領域編 絵画製作・造形』1987年 川島書店
根津三郎『クレヨン・クレパスの本』昭和62年 サクラクレバス出版部
山形 寛『日本美術教育史』昭和57年 黎明書房

実践プログラム作成助言・指導

- 小野 和（東京成徳大学）
堀内秀雄（東京成徳短期大学）

研究協力

- 千葉大学教育学部美術科絵画研究室
東京成徳短期大学附属第二幼稚園
日本学術振興会（科学研究費交付）
(五十音順)



写真 1：描写した10メートルの油彩用キャンバス



写真 2：描写中の5歳児の様子



写真 3：自分の好きな部分をハサミで切り抜く

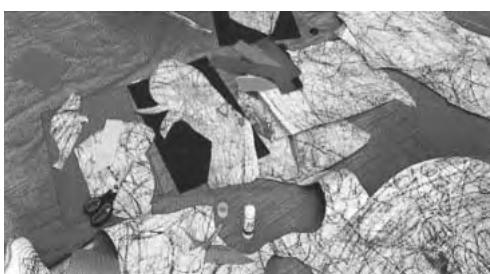


写真 4、5：切り抜いたキャンバスをもとに形態・色彩の構成を行う





写真6：子どもたちが切り残したキャンバスを保育者がトリミング・額装する



写真7：東京芸術大学学生会館ギャラリーでの展示風景（写真6の作品を含む）

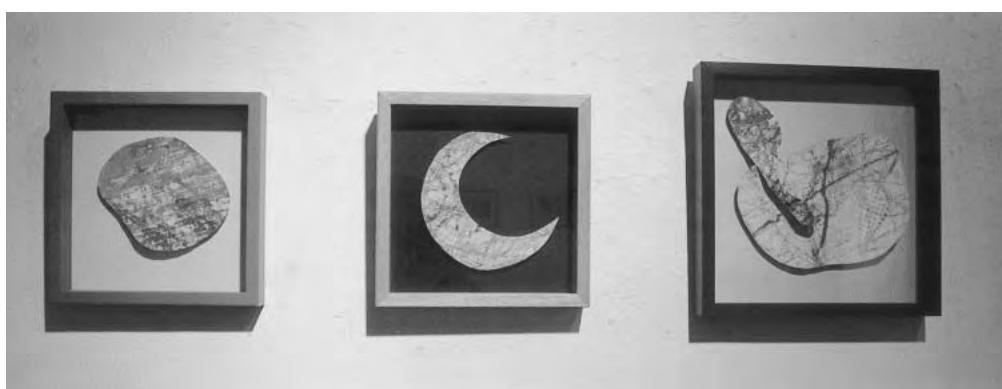


写真8：展示風景部分拡大